

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

野元 裕樹

印

学位申請者 蔡 熙鏡（チェ ヒギョン）

論文名 ニヴフ語東サハリン方言の参照文法

結論

蔡熙鏡氏から提出された学位請求論文「ニヴフ語東サハリン方言の参照文法」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は野元を主査に、副査として学外からニヴフ語の特に音韻論を専門とされている札幌学院大学教授白石英才氏をお招きし、これにアジア・アフリカ言語文化研究所の呉人徳司教授、同じく同研究所の渡辺己教授、主任指導教員である風間伸次郎教授を加えた5名で構成された。

論文の概要

本論文はニヴフ語東サハリン方言の全体像にせまった現在のところ日本で唯一の記述文法である。ニヴフ語の使用地域は日本に近く、アイヌ語や日本語、朝鮮語の起源や類型を考えていく上でも重要な言語の一つである。しかも消滅の危機に瀕している言語であって、その記録は急務である。本論文のデータは、ロシア共和国極東サハリンでの5回にわたる現地調査によって得られた一次データが中心で、さらに先行研究からのデータも積極的に活用している。本論文は音韻・文法の記述と4つのテキストおよび約3,000項目の語彙集から構成されている。記述の後半である第II部では理論的問題が扱われており、この言語の示す他動性や定性などの問題についてのオリジナルな研究結果が示されている。

本論文の構成は以下のようにになっている。

第1章では、本稿の内容を理解するうえで必要であると思われる背景知識を提供している。具体的には、ニヴフの居住地域や人口、言語の系統、社会言語学的状況、東サハリン方言の文法概説などについて示している。

第2章では、この言語の音韻論について記述している。ニヴフ語東サハリン方言には6の母音と28の子音がある。音節構造は非常に複雑であり、音節の頭では最大2つ、音節末では最大3つの子音連続が可能である。語根末において、母音が現れる場合とそうではない場合で揺れが見られることがあるが、それは語中音消失 (vowel syncope) という音変化が起きている途中の過渡的段階にあるためであり、ニヴフ語の音韻論の記述を複雑にする一つの原因になっている。音素配列論では音節構造を詳しく分析しており、今後他方言と

の違いを明らかにするための資料としてきわめて有用である。強勢に関しては、先行研究での指摘とは異なり、原則として第一音節に落ちることを指摘した。さらに、有声化や内破音化などの現象、頭子音交替が起こる音韻的環境と形態統語的環境についても詳しく記述している。

第3章は形態論である。ニヴフ語の名詞に文法的な性・数のカテゴリーはなく、複数の概念は接語 (=k*un* ~ =y*un*) を用いて標示する。文末の直説法の動詞は、(代)名詞に付加される複数標識と同じ形式 (-t ~ -nt) をとることがあるが、その際には主語が複数であることを表す。さらに、目的語に付加された複数標識が主語の複数性を表すことがあるということを新たに指摘した。このような現象は近隣の朝鮮語にも見られ、対照言語学的な観点からも興味深い。

ニヴフ語は主格-対格型の格標示体系を持つ。主格、対格、属格の機能を示す名詞に形式上の区別はなく、これらの名詞が示す統語関係は主要部の規則的な頭子音交替によって示される。与格は稀に連続して現れることがあり、これはこの言語の膠着的な性格を示すとともに、与格の接語としての性格を反映しているといえる。1人称複数の人称代名詞には包括形と除外形の区別があり、1/2/3人称単数と再帰代名詞には自由形と拘束形(接語)が存在する。

動詞は、いくつかのムードの形(直説法、命令法、疑問法)と様々な非定形の形(連体、副動詞)によって屈折する。命令と一部の副動詞(先行副動詞、継起副動詞、等位副動詞)には、主語の人称と数に関する一致を示すものがある。ニヴフ語の動詞のもつテンスは未来と非未来で対立しており、東サハリン方言において、未来は -i ~ -j で標示される一方、非未来は明示的な形式を持たない。副詞節に未来の接尾辞が現れることはなく、主節以外では、もっぱら連体修飾節と補文節にのみ観察される。ニヴフ語におけるアスペクトの標示には、[1] 語幹派生接尾辞を用いる方法、[2] 補助動詞を用いる方法、[3] 動詞の重複による方法が用いられる。特に、意図や推測を表す接尾辞 -inə が「起動」のアスペクト的な意味に解釈される際には、動詞が表す状況の認識時点がその意味の実現に大きく関わっているということを指摘した。

ニヴフ語の使役構文に関しては、従属節と主節とでは有情物の被使役者がとる格に大きな異なりのあることを指摘し、使役構文が表す意味範囲の広さを明らかにした。さらに、東サハリン方言の動詞複合体について、複合体を構成する接尾辞・接語・補助動詞の承接順序と機能についても記述を行い、先行研究におけるこれらの扱いとは異なった見方を提示した。

第4章では、統語論についての分析を示している。自動詞主語を S(subject)、他動詞主語 A(gent)、他動詞目的語 P(atient)、複他動詞の2つの目的語を T(heme) / R(ecipient)、述語を V(erb) とした場合、ニヴフ語が示すこれらの基本語順は SV / APV / ATRV となっており、かなり厳格な主要部後置型のパターンを示すことがわかる。名詞句においては主要部後置型の語順が義務的であり、この語順を入れ替えることはできない。節全体においても上記の基本語順をとる傾向を示すが、ここでは目的語を節の頭に置くことも可能である。ただし、その際には自立形の動詞を用いなければならないことが明らかになった。

この第4章における複他動詞や連体節、疑問文をはじめとする文法的諸問題を記述する際には、近年の類型論的な知見や、通言語的な概念を踏まえており、近隣の言語との対照も視野に入れつつ、ニヴフ語の特徴を明らかにしていくことを目指している。特にアムール方言において‘comitative’, ‘correlative-associative’として先行研究が扱っていた形式について、東サハリン方言では「A=ASC B」「A=ASC B=ASC」構造が全体で主語となるのに対し、「A B=ASC」構造においてはAのみが主語となり、B=ASCは主語の外にあるということが、副動詞の人称と数による一致から判断できる、という事実を新たに指摘した。

比較構文においては、同程度のものの比較に用いられる動詞 *voci-*「同じだ／似ている」の機能を文法化の観点から記述した。この表現は、近隣の朝鮮語において似た意味を示す動詞 *kath-*「同じである」ときわめて類似した振る舞いを示すという点も指摘した。すなわち、この動詞が本来の意味「同じだ／似ている」で用いられる場合には、比較の対象となる名詞が随伴者を表す接語で標示されるが、比較の対象となる名詞の直後にこの動詞が来る場合には「～のようだ」の意味に解釈される。さらにこの動詞は意図・推測を表す接辞 *-ina* を含む語幹に付加されて、一種のモーダル的な意味機能を果たすことも示した。

第5章では、論文全体のまとめとして、本論文が持つ意義と今後の課題について整理している。

審査の概要及び評価

上記のように蔡熙鏡氏の博士論文は、新しい知見を多く示しつつ、記述言語学的な観点からニヴフ語東サハリン方言の文法の全体像を示したことにまず大きな価値がある。

本論文の内容に関して、各審査委員からさまざまな評価がなされた。各委員より特に高く評価されたのは、以下のような点である。

- ・ニヴフ語の系統はいまだに不明であり、言語類型論に資するデータとしてもこの言語の記述は重要な意味を持っている。特にこの言語の使役や動詞複合体についての記述は非常に興味深い。
- ・他方言に比べて、東サハリン方言はその研究が遅れていると言われており、この方言の文法のみならず、語彙やテキストも収録されている点で資料的な価値も高い。方言差についても指摘があり、貴重である。
- ・内破音化や子音クラスターの種類などについて、多くの例を挙げて分析している。
- ・自他対応や *insubordination* などの現象にも注目して、これをよく扱っている。

もちろん本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験において、審査委員からいくつもの質問、要望が出された。その指摘のうち、重要な点としては以下のようなものをあげることができる。

- ・参照文法として言及すべき現象の記述がなかったり、記述の量が少なかったりする項目がある（例えば、名詞句の構成要素の配列順序、数量詞、感嘆文、「抱合」現象）。

- ・品詞分類の基準や接語の位置付けに関する考察がきちんとなされていない。
- ・先行研究に関する説明が不十分であるために、先行研究の内容と本論文の内容の区別が不明な箇所がある。
- ・音声表記に関して一貫していないところがある。
- ・例の提示に関して、例が一つしかなかったり、例外しか示されていない箇所が散見される。
- ・アムール方言や西サハリン方言との諸要素の違いについては、表などによって整理して示してはしなかった。

各委員からのこれらの指摘も、本論文の価値を高く評価した上で今後のさらなる研究の進展を期待したものであり、建設的な意見として提言を行っているものといえる。

最終試験における質疑においても、申請者の応答は的確で、委員たちとの間で学問的に興味深い議論が行われた。その過程から、申請者が指摘された問題点をよく自覚し、今後それらを解明していくのに十分な学識と強い意欲を持っていることが確認された。ニヴフ語東サハリン方言の文法全般の記述研究の進展、さらにはニヴフ語の他の方言の記述研究や方言間の比較・対照研究、に関して、申請者の今後の活躍が十分に期待できる。

審査委員会は、学位請求論文の内容、ならびに最終試験（公開審査）の結果より総合的に検討した結果、全員一致で申請者蔡熙鏡（チェヒギョン）氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。